

「質疑応答の力」をもとに考える力を育成する

村上市立さんぽく北小学校

教諭 白澤 道夫

1 はじめに

これまでの実践から「考える力」について以下の5つの見解をもっている。

1 考える力とは『対象（課題や相手）を意識し、その意図や主張を自分なりに理解するために活用する力』と捉える。

したがって単に思考・判断力を指すのではない。読解力や表現力、そして課題解決の原動力となる学習意欲も含めたトータルな学力である。

2 考える力を育成するためには、問題解決的な学習を土台に据えた、児童相互の言語による関わりのある学習が必要不可欠である。

3 考える力の育成を目指した実践に「話し合う」活動が多く見られるが、多くが一方通行の場合が多い。見方や考えの異なる相手との意見交換をすることが「考える力」を育成する話し合いになる。

4 「考える力」を育成する「話し合い」を授業で導入するには、関わりが必然となる課題や働き掛けが必要である。また実際に「話し合い」を行う際には、場の設定も重要な要素になる。

5 「考える力」を育成する「話し合い」を成立させるためには、共感的な学級の雰囲気作りの他に、聞く・話す力を中心にした能力を育成することである。

その中でも特に「質疑応答の力」に着目する。

質疑応答の力は2つに分けられると考える。一つは相手の見方や考えについて疑問を投げかける力（自称 介入力）である。もう一つは疑問や課題について自他の考えの相違等を吟味し、相手に返す力（自称 返答力）である。

これら2つの力による「質疑応答」は、根拠をもとにした「話し合い」になることが必然であり「考える力」の育成につながる。

以上から「考える力」を育成するために、質疑応答の充実における効果的な手立てや方策に焦点を当てて実践を進めていくことにした。

2 実践学年および教科等

実践学年 5学年（男子5名 女子15名 合計20名）

実践教科 社会科

その他 県立教育センター「実践力向上研修」の一環である『PISA型読解力を高める授業』と関連させ授業実践を公開し、取組の効果の検証に役立てる。

3 実践

(1) 「考える力」を育成するための土台作り（日頃の実践で行っていること）

① 共感的な学級の雰囲気作り

ア 個々の考えを示し、生かす工夫

・児童個々に「マグネットシート」を持たせ、自分の考えを掲示させる。

（指名等による「代表」の考えではなく、全員の考えを示すことで、考える意識をもたせる。）

・分類や関連づけを行い、個々の考えの位置づけを明確にした上で学習や活動を行う。

（少数意見にも目を向けることで、個々の考えの是非ではなく、意味づけを意識させる。）

イ 話し合いの工夫

・「興味・関心を引き出す」「多様な考えを引き出す」「オープンエンド」な課題を設定する。

・課題や意図に合わせて形態を工夫する。（ペア・グループ（学習班または興味関心別）・全体・フリー）

・時間を十分に確保する。（最低でも15分間）

ウ その他

- ・ 家庭学習で「ふりかえりノート（その日の授業内容を整理し直す。）」や「短作文（課題についての自分の考えを1枚の原稿用紙にまとめる。）」に取り組ませる。

② 聞く・話す力の育成

ア 言語技術の取組

- ・ 児童個々に身に付ける能力（聞く話す・読む・書く）を明確にし、実践する。
- ・ 毎週金曜日の国語の時間（15分間）に取り組む。

イ 児童のかかわる姿（「授業で目指す姿」）の取組

（資料1）

- ・ 言語技術の活用場面を明確にし、日々の授業で具体化する。
- ・ 指導案等、授業研修においても検討や協議の柱の1つとする。

ウ 学習カード（「考えるタネ」）による取組

（資料2）

- ・ 学習で使っている見方・考え方を明確にし、活用への意識付けを図る。

（2）授業（12月5日に公開した研究授業の概要）

① 授業の手立ておよび実際の様子

個人の考えが「見える」ワークシートの作成・活用

（資料3）

質疑応答がうまくできないことの要因は、相手の考えを知る手段が、聞く力による部分が大きいためと考えた。

つまり、相手の考えが音声言語に終始してしまうと「聞く・メモ等での情報収集」「使用語句の理解」等による個人差が出てしまい、相手の考えを十分に把握することができないために、質疑することができないということである。

また、応答する側にとっては、相手の質疑の内容が、自分の考えのどこに関するものであるのかが不明確であるために「かみ合わない」質疑応答になることにもつながる。

そこで、ワークシートを作成・活用することで、個人の考えを「見える」ようにした。作成・使用したワークシートは以下の2つである。

「分類表」…情報整理のために使用する。集めた情報（付箋紙を使用…1枚につき1つの情報）を視点ごとに分け、それぞれの視点ごとにまとめる。

「思考表」…各視点のまとめや、課題全体の結論を出すときに使用する。集めた情報の中から、必要な情報を選択し、それぞれの情報を関連づける解釈をし各解釈をもとに結論を導き出す。

この表により、個々の考えの流れが見えるようになることで、質問する側・答える側の双方が共通理解のもとで「かみ合った」質疑応答を行うことができる。

ペアによる考えの検討

質疑応答の力も考える力も、児童個々に身につけさせていく必要がある。

そこで、考えの交流場面をペアにすることで、お互いの結論や情報をもとに解釈したことの相違等が明確になる。また、常に質疑応答の主体になるので、考えの妥当性について密度の濃い検討をすることができる。

ペアによる検討を通して気づいた自分の考えへの追加や訂正は、時間を設けて見直しをさせる。（見直した箇所には、色別の付箋紙を利用し、考えの変容が分かるようにする。）

② 実践の成果（○）や反省・改善点（△）

※参観者の意見や感想をまとめたもの

○ 児童は、熱心に質疑応答を中心とした「検討」を行っていた。応答の際には、質疑内容に沿って、地図帳など資料を根拠にした自分の考えを、しっかりと述べていた。

○ 分類表や思考表は「児童が課題についての考えをもつこと」や「質疑応答や検討がしやすいこと」そして「考えを深めること」に効果がある。

△ 個々が使用する情報の理解を十分に理解させる必要がある。

△ 質疑応答では、相手の欠点や不足している内容を指摘することで終始するペアもあった。